唐古・鍵考古学ミュージアム
KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM

ミュージアムコレクション 25

占いに使った骨

●コレクション・データ

時　代　弥生時代　中期
調　査　唐古・鍵遺跡　第37次調査
発見年　1989年
大きさ　長さ18.6cm・幅11.2cm
展示位置　第1室・「いのりとまつり」

人はいつの時代にも迷い、「カミ」のお告げを期待し、祈るものです。時代が遡れば遡るほどその傾向は強くなるでしょう。占うという風習は、すでに弥生時代にも存在しました。それは占いに使われた「卜骨」と呼ばれる骨が西日本で多く出土していることから分かります。

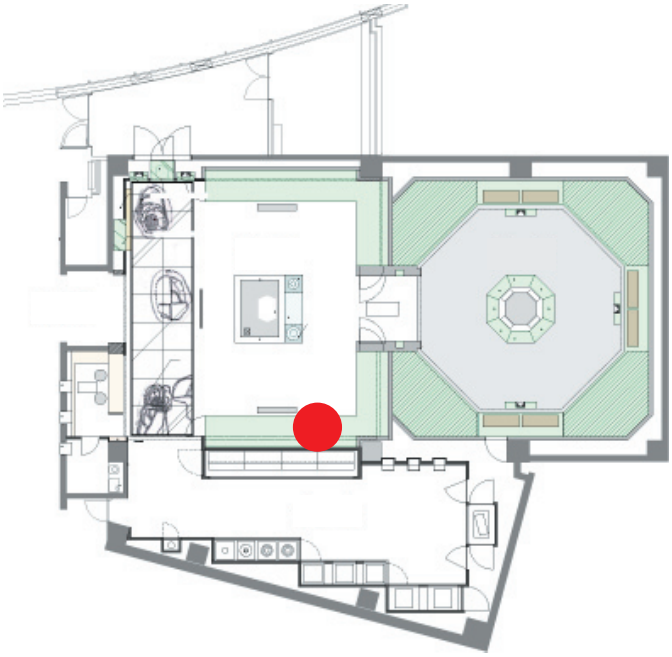
卜骨は鹿やイノシシの肩甲骨などの表面に黒く焦げた焼灼痕があるもので、これは先端が焼けている棒を押し当て、生じたひび割れや焦げ具合によって吉凶を占ったと推定されています。

今回紹介する卜骨は、鹿の肩甲骨を用いたもので、平坦な内面側から焼いています。骨の一番薄い部分に縦方向7ヵ所、黒く焦げた焼灼痕が点状にあります。唐古・鍵遺跡では、焼灼する位置は時期によって異なり、これより古い時期は細く厚い基部に施しています。

さて、卜骨の風習は、中国や朝鮮半島など東アジアで広く見られます。中国の殷王朝期には、亀の甲羅を使った亀卜が特徴的で、占いの日付や内容を線刻した甲骨文字が見られます。甲骨文字の分析によると、祖先や自然神への祭祀、戦争、狩猟の可否に関連する内容が多く、風雨や年ごとの豊凶を占ったものも見られます。

今回の卜骨は、井戸に意識的に投棄されたもので、このほかに壺や高坏、タヌキの頭骨、アカニシなどがありました。これらは占いの場に供えられていた品物かもしれません。このような例は20次調査にもありますが、大半は特別な出土状況を示すものではなく、溝や穴にゴミとして捨てられていました。

『魏志』倭人伝には、「骨を灼いてトし、以って吉凶を占う」とありますが、弥生時代の卜骨に甲骨文字は見られず、占いの具体的な内容は不明です。唐古・鍵遺跡では盛んに占いをしていたようですが、何を占い、その結果がどうであったのか、残念ながら知る手がかりはありません。

唐古・鍵考古学ミュージアム
【☎34・7100】
開館時間　午前9時～午後5時（月曜は休館）
観覧料（カッコ内は20人以上の団体料金／15歳以下は無料）
▼大人　200円（150円）
▼高校生・大学生　100円（50円）

ミュージアム上面図と展示位置